

僕の寫眞機 萩原朔太郎

寫眞といふものに、一時熱中したことがあつた。しかし僕の寫眞機は、普通のカメラと大いに變わつたものであつた。普通の寫眞機は、レンズが一つしかないのであるが、僕はレンズが二つあつて、それが左右同時に開閉し、一枚の細長い乾板に、二つの同じやうな繪が寫るのである。これを陽畫にしてから、特殊のノゾキ眼鏡に入れてみると左右二つの繪が一緒に重なり、立體的に浮き上つて見えるのである。と言へば、すぐ讀者にも解るであらうが、つまり僕の愛玩した寫眞機は、日本で俗に双眼寫眞と呼んでゐる、悌蘭西製のステレオスコープなのであつた。

このステレオスコープは、日本に来てから随分古い年代が経ち、既に明治初年時代にさへ、大形の物が輸入されてゐたにかかはらず、どういふわけか、日本では一向に流行しない。僕がこんな器械を持つてゐることさへ友人たちは輕蔑して、何んだそんな玩具みたいなものをといふ。歐洲、特に悌蘭西あたりでは、今尚盛んに行はれて、寫眞材料店の飾窓に幅を利かせて居るといふステレオが、日本で玩具扱ひにされ、市中にその販賣店さへもな

いといふのは、何かそこに彼我國民性の趣味的相違があると思ふが、とにかく僕にとつては、このステレオスコープだけが、唯一無二の好伴侶だつたのである。そしてこれには僕自身の爲に必然の理由があるのだ。

元來、僕が寫眞機を持つてゐるのは、記録寫眞のメモリーを作る矯でもなく、また所謂藝術寫眞を寓す爲でもない。一言にして盡せば、僕はその器械の光學的な作用をかりて、自然の風物の中に反映されてる、自分の心の郷愁が寫したいのだ。僕の心の中には、昔から一種の郷愁が巢を食つてゐる。それは俳句の所謂「他びしをり」のやうなものでもあるし、幼い日に聽いた母の子守唄のやうなものもあるし、無限へのロマンチックな思慕でもあるし、もつとやるせない心の哀切な歌でもある。そしてかかる僕の郷愁を寫すためには、ステレオの立瞳寫眞にまさるものがないのである。なぜならステレオ寫眞そのものが、本来パノラマの小模型で、あの特殊なパノラマ的情愁―パノラマといふものは、不思議に郷愁的の侘びしい感じがするものである―を本質してゐるからである。

僕はそのカメラを手にして、町や田舎の様々な景色を寫した。ある高原地方では、秋草を前景にして、遠く噴煙してゐる山を寫した。ある山間の田舎町では、洋物店の軒にさがつた、紅白だんだらの瞬幅傘を前景にして、人通りのない晝の寂しい街路を寫した。それを箱に入れて覗いて見ると、旅に見た通りの景色が、第三安元の立體になつて、さながら浮き上つて見えるのである。此所で「實景のやうに」と言ひたいが、わざとさう言はないのは、ステレオのパノラマライクが、賞景とは少しちがつて、不思議に幻想的であるからである。此所では前景と後景との距離がパノラマに於ける買物と繪畫のやうに、錯覚めいた空間表象を感じさせる。その爲前景の秋草や踊幅傘やが、強く印象的に迫つて来て、後景が一層遠く後退し、長い時間の持續してゐる夢の中で、不動に静寂してゐるやうに思はれるのである。そしてこの幻想的な印象にもまさつて物侘びしく、ロマンチックに、心の郷愁をそそることは言ふ迄もない。僕が普通の寫眞に興味を持たず、ステレオばかり寫した理由も此所にある。普通の寫眞は卒面であり、二次元の世界しか再現しない。故にそれ

が、寫眞的にリアリスチックであればあるほど、いよいよ僕の心の「夢」や「詩」から遠ざかつて来る。僕の心のノスタルジアは、第三次元の空間からのみ、幻想的に構成されるからである。

僕は今でも、昔ながらのステレオスコープを愛藏してゐる。だが事變の起る少し前から、全くその特殊なフィルムや乾板の輸入が絶え、たださへ入手困難だつた材料が、いよいよ絶望的に得られなくなつてしまつた。その上にカメラも破損し、安債の玩弄品以外には、新しい機械を買ふとができなくなつた。とれは僕にとつて、いささか寂しいとどである。「アサヒカメラ」昭和二十年十月号新潮社版『萩原朔太郎全集第五卷』所収